

# 第148回 筒美京平のイントロ哲学と 職人魂を沸き立たせた歌手

私の手元に昭和47年4月に発売された平山三紀（現・みき）の2枚目のLPレコード『希望の旅』があります。見開きジャケットを開くと、

帽子をかぶった平山のモノクロ写真を囲むように収録曲が羅列されているのですが、注目すべきは、曲名よりも大きな活字で「橋本淳 作詞／筒美京平 作曲・プロデュース」と記されていたことです。

つまり、このLPは作曲家・筒美京平の主導で制作されたことを意味し、「音楽プロデューサー」という存在がまだ一般に認知されていない時代に、平山所属のコロムビアレコードが31歳だった筒美を信頼し、かつまた筒美自身が平山を特別視していたことの証でした。

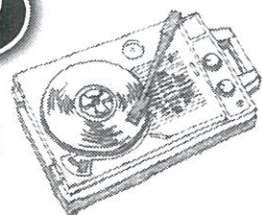
平山のデビュー曲『ビューティフル・ヨコハマ』から『真夏の出来事』『ノアの箱舟』『フレンズ』までのシングル盤に書き下ろし等を加えた12曲は、バラエティーに富む内容に加え平山の声の魅力もたっぷり楽しめるといえる、筒美マジックの本領発揮

といえるものです。

「いい曲」よりも「売れる曲」を優先する筒美にとって、歌が始まる前

## 名曲カルテ

# 昭和歌謡と いままで



堀井六郎  
絵・松本浦

の冒頭5秒間こそが最重要ポイントであり、その曲作りの戦略は「イントロの印象付け」にありました。

それを知ったうえで右記LPのイントロを再聴してみると、そこからはバート・バカラックやシュープリームスなど当時一世を風靡した洋楽にインスパイアされたものや、青春歌謡とは似て非なるオールディーズ風の女声コーラスやストリングスの挿入、あるいは筒美自らが弾く歌謡曲の前奏らしからぬピアノ演奏が聞こえてきます。従来の歌謡曲歌手とは異質の声と歌唱法をもった平山三紀という媒体を活かしつつ、歌謡曲と洋楽のさまざまな融合を試行していたのでしょ。

「売れる曲」創作のためには、親しみやすいメロディーという日本人好みの素材を活かしつつ、垢抜けた味付けが欠かせないことを熟知する筒美は、洋楽風の仕上げまで行なう必要性を自覚、多忙の限界だった38歳時の作品『魅せられて』あたりまでは自ら編曲も行ない、「売れる曲」の制作に没頭していました。

筒美が海外から取り寄せた輸入盤を聞く際、冒頭の5秒ほどを聞いて自分の琴線に触れなければ、すぐにレコード針を上げて次の曲の溝に落とすという作業を繰り返していたのも、イントロにこだわるヒットメーカー職人としての面目躍如たる習慣で、洋楽の最新情報に対する彼の執念さえ感じさせます。

クラシックや讃美歌から始まりジャズで学生時代を過ごした筒美にとって、GS以前の歌謡曲や騒がしいロックなどに愛着はありませんでした。依頼されれば好き嫌いなく応じましたが、手垢のついていない新人や平山のような筒美好みの個性派に対しては創作への興味が深まり、声を楽器のように捉えながら、すぐに頭の中で譜面を描いたことでしょう。

いしだあゆみや初期の郷ひろみがそうだったように、ビブラートを用以ずにプツンと音を切る平山三紀の歌唱法は、聞く人によって投げやりにも聞こえるところが魅力で、筒美の職人魂がさらに沸き立ったことと思います。

